

児童相談所一時保護所における保育士の役割

八巻 みゆき・佐々 加代子

はじめに

次世代育成行動計画として国が方策を講じ¹⁾、その後区市町村にいたるまでの地方自治体が第一期として平成 17年度から 21年度までの 5 年計画を実施、この 3 月で取り組みの点検評価をした上で、第二期として平成 22年度から 26年度までの策定を示している²⁾。子育て支援をどのようにすすめていくのかについては、それぞれの自治体の真価が問われてくる。どの地域も「住まうにはこの町」を目指している。出生率が多少なりともあがったとはいえ、その一方で、虐待の事例はすぐそばの保育園にも、地域の一般家庭にも見受けられるようになってきている。報道される虐待事例は、目を覆うばかりの経緯の中で死に至っているものが多い。命の叫びを聞いていたという地域の人たちは、それほどひどさではないと思ったとも言う。救えなかったのだろうかという思いが痛みとして残る。虐待防止の手引き³⁾が平成 21年 3 月に厚生労働省から刊行されている。子どもをどのようにして助けていくのかについて詳細に記載されている。福祉や子育て最前線にいる専門職としての責務の果たしかたが見出せる。

現代を同じように生きている大人がなすべきことはいったいどのようなことなのだろうか。筆者の一人の八巻は、児童福祉施設保育士としての長年の経験のなかで、児童相談所一時保護所の保育士として 10 余年の経験をしてきた。その場に来る子どもたちのそれぞれのその後の行き先が決まるまでの期間に、子どもたちとの生活ともにしながら、保育士として対応してきた。現在はその職を辞した。多くの子どもたちが現在もなお、そこで一定期間暮らしている。一時保護所だからこそ、子どもたちの生活の身近だからこそ見えてくるこ

となどがある。

本論では、児童相談所の一時保護所での子どもの生活について再考し、限られた期間のなかで子どもたちとの質的対応の可能性を探るべく、保育を探索することと、保育士の役割についての検討をする。

・児童相談の流れと一時保護所について

1) 児童相談の流れ

児童相談は図 1⁷⁾に示すような流れがあり、相談の種類を区分すると表 1 のように多岐にわたる。昨今は相談として受け入れていく経路としては、地域住民からの通告が増えてきているという。

2) 一時保護所について

相談を受け入れ、その子どもを保護者との生活の場から離れて一時的に生活の場として受け入れていくところが一時保護所になる。保育士としての役割の主たるものは、この場における生活指導になってくる。保護の場として預かる子どもたちは、さまざまな問題を秘めている。そのことを生活をともにしながら、観察をおこない、「一人の子ども」に対してどのように接していくといいのかについてのヒントになるものをも見出していく。子どもたちの対象年齢はおおむね 2 歳から 18 歳までであり、その年齢層の幅の広さゆえに、その場で出会う子どもの抱える「問題」も幅広く深い。一時保護所は子どもたちがこれから先の生活において、この場を居として定めて生活をしていくことになるという場ではなく、次なる居をもつ前の場である。その限定された期間のなかで、問題ゆえにこの場で暮らすことになった「子ども」と日々を施設関係者たちが関わりながら過ごしていく。子どもたちの生活は、幼児（未就学児）と学齡児

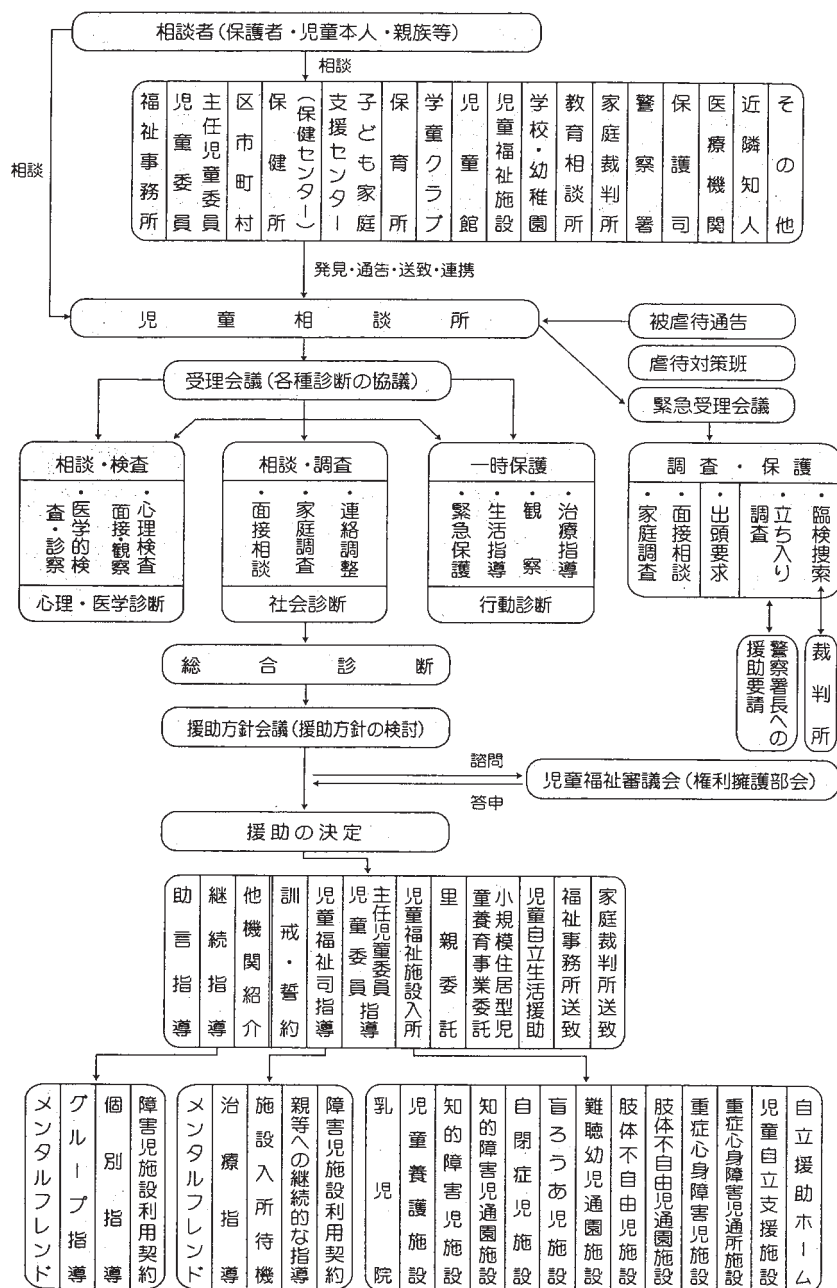


図1 児童相談の流れ

相 談 区 分		内 容
養 護 相 談		虐待相談 養育困難（保護者の家出、失踪、死亡、離婚、入院、就労及び服役等）、 迷子に関する相談。養育家庭（里親）に関する相談。
保 健 相 談		一般的健康管理に関する相談 （乳児、早産児、虚弱児、児童の疾患、事故・ケガ等）
身体障害相談	視聴覚障害相談	盲（弱視を含む）、ろう（難聴を含む）等視聴覚障害に関する相談
	言語発達障害等相談	構音障害 ^{※1} 、吃音、失語等音声や言語の機能障害をもつ児童、言語発達遅滞、注意欠陥障害を有する児童等に関する相談
	肢体不自由相談	肢体不自由児、運動発達の遅れに関する相談
知的障害相談	重症心身障害相談	重度の知的障害と重度の肢体不自由が重複している児童（者）に関する相談
	知的障害相談	知的障害児に関する相談
	ことばの遅れ相談（知的遅れ）	ことばの遅れを主訴とする相談で、知的遅れによると思われる児童に関する相談
発 達 障 害 相 談		自閉症、アスペルガー、ADHD（注意欠陥／多動性障害）、学習障害等の症状を呈する児童に関する相談
非行相談	ぐ犯行為等相談	虚言癖、金銭持ち出し、浪費癖、家出、浮浪、暴力、性的逸脱等のぐ犯行為 ^{※2} 、問題行動のある児童、警察署からぐ犯少年として通告のあった児童等に関する相談
	触法行為等相談	触法行為 ^{※3} があったとして警察署から法第25条による通告があった児童、犯罪少年 ^{※4} に関して家庭裁判所から送致のあった児童等に関する相談
育成相談	不登校相談	学校、幼稚園、保育所に登校（園）できない、していない状態にある児童に関する相談
	性格行動相談	友達と遊べない、落ち着きがない、内気、臆断 ^{※5} 、家庭内暴力、生活習慣の著しい逸脱等性格又は行動上の問題を有する児童に関する相談
	しつけ相談	家庭内における幼児のしつけ、遊び等に関する相談
	適性相談	学業不振、進学、就職等の進路選択に関する相談
	ことばの遅れ相談（家庭環境）	ことばの遅れを主訴とする相談で、家庭環境等言語環境の不備等によると思われる児童に関する相談
そ の 他 の 相 談		措置変更、在所期間延長に関する相談等

※1 構音障害：口唇・舌・口蓋や脳機能などの障害により、話ことばを正確・明瞭に発音できない状態をいいます。

※2 ぐ犯行為：保護者の正当な監督に服しない性癖のあることなど一定の事由があって、その性格または環境に照らして、将来、罪を犯す、または刑罰法令に触れるおそれのある少年の行為をいいます。

※3 触法行為：14歳未満で刑罰法令に触れる行為をいいます。

※4 犯罪少年：罪を犯した14歳以上20歳未満の少年をいいます。

※5 臆断（かんもく）：話す能力があるにもかかわらず、心理的原因等で、学校等の特定場面、あるいは生活全般で話さない状態をいいます。

表1 相談の種類⁽⁷⁾

(小学生以上)に分かれて、日課に沿って図2の流れの中での生活になる。幼児の場合には、保育における基本的生活習慣；食事、排泄、睡眠、着脱、清潔関係の自立の過程もその支援内容に組み込まれてくる。学齢期の子どもたちにおいても、生活のリズムをはじめとして、バランスの取れた食事や睡眠をはじめとして、人間が生きることについての基盤について、あらためて栄養士や看護師、保育士たちが支援をしていくことになる。子どもたちにとっては、多くの見知らぬ(専門職である)大人たちに守られながらの中での生活が始まることになる。生活の流れは日々の暮らしのなかで動

いていくだけに、保育士の支援内容は日々の中で過ぎてしまいがちになる。その場の暮らしのなかで、とりわけ保育士は、多様な年齢層の子どもの集団生活を支援しながら、一人ひとりの子どもたちの言動などを聴きとめてその意味を探り、子どもの支援についての策を検討する資料になるものを集めることが可能になる。日々の何げない生活の中で、意識化したなかで得ていく情報は、一人ひとりの問題を解きほぐし、先への方向性や見方への活路に繋がることにもなってくる。生活指導の内容は、このことを含むと濃度が高いものになる。

幼 児	7:00	10:00	12:00	15:00	18:00	20:00
	起床食	自由遊び	おやつ グループ活動	昼食 お昼寝	おやつ 入浴 グループ活動	自由遊び 夕食 テレビ おやつ 就寝
学 齢 児	7:00	12:00	15:00	18:00	21:30	
	起床食	自習 学習	昼食 課題活動	おやつ そうじ 入浴	夕食 余暇活動 おやつ 1日のまとめ 就寝	

図2 一時保護所の生活

3) 一時保護所における子どもたちの思いの段階について

子どもたちはこの場に来るまでの間に、身体的、心理的に深い傷を負っていることが多い。受け入れていく専門職の人たちは、①生活のなかで癒す時間としておきながら、②落ち着いて生活できるように配慮して、暮らしの中で生活のリズムが安定するようにすること、③多くの専門職種連携によって、子どものその先の方向性が見出せるようにすること、を目指すことになる。急遽住まいとしての場になった居ることに子どもたちの思い

は、時間軸のなかでみると、おおよそ3段階に分けられる。保育士たちが進めていく段階に対応させて記述してみた。保育士はとりわけ、生活全般にわたるなかで保育・支援を行うことになる。

①不安とおののきを見せる段階

—さまざまな行動表現—

なぜこの場にいることになってしまったのかについての納得ができない様子がさまざまな言動で見出される。幼児の場合には、親と離れて知らない大人、知らない子どもたちの中にいることで、不安感はおびえや大泣きで表現する。「おうちがいい」「ママがいい」

「かえる」を繰り返す。食事を拒否し、その場に座ったまま動かない子どもたち、夜になると窓に顔をくっつけて「お迎えいつくの」と聞くなど、がある。「虐待」ではないかと判断された子どもたちについての観察事項としてある。

問題の内容として警察の補導などで来た子どもたちは「ふざけんなよ」「みんなやってんのに」「親を呼んで」と納得できない気持ちをさまざまな言葉などの表現で精一杯訴える。保護者が身元引受人として拒否したからここにいるということの理解ができないままのときの表現である。身元引受人として拒否したためにここにいることがわかると「裏切った」「むかつく」など、親へのいきどおりの思いを訴える。

規則正しい生活のなかでのとまどいを苦痛なこととして表現する段階

親の生活のサイクルのなかで昼夜逆転の生活などを送ってきた子どもたちにとっては、規則正しい生活を送ることが戸惑いになる。苦痛であるという言葉をもらしてくる。以下がよくあげられる事項である。

- ・決まった時間におき、決まった時間に寝ること
- ・食堂の席に着くこと（知らない同士のなかで食べること、など）
- ・食事を取ること
- ・勉強のために椅子に座ること
- ・多くの人と接すること

生活のリズムを見出し、自分の興味関心あるものに目を向けることや得意なものを見つけていくことができるようになる段階

保育士は、子どもたちの生活を指導しながら、なぜこの一時保護に至ったのかについて軌道修正することはなにか、これからどのような生活をしていくのかについて探っていく。栄養士、看護師など専門職同士の連携をもちながら、一人ひとりの問題と生活に向かいあう。今後の方向性をさぐ

るのに、日々の生活のしかたの言動などから子どもの思いを探っていくことになる。保育士に課せられてくる重要な役割である。

の段階がとりわけ重要になる。さまざまな苦痛を訴えてくることから見出せてくる子どもの、これまでの心のなかに抱え込んでいた内容が、その「苦痛という表現」のなかから見えてくる。この時間がかなり重要になる。積み上げていく日々の時間が癒していく過程そのものでもある。子どもが安定してきてこそ、苦痛も述べられることになる。一段階を経てきたととらえていくことで、その先の対応を急がないことは重要になる。子どもによって、この段階がかなり長いことも多い。丁寧にすすめていくことで、子どもとの会話が増えてくることがある。そこで会話を重ねながらのなかに、子どもの思いを読み取り、秘めていたつらさを見出していくようにしていく。それが、動きを、子ども自身が自らとるようになってくることにつながる。

からへの段階のなかで、とりわけ子どもの会話から見出せた典型事例とも思える問題について、向かい合いかたを紐解いてみることにする。

・事例「塊」

中学３年生女兒。妊娠に気がつくが、相手が誰かが解らない。

病院へ行くには保険証を使う。お金がいる。親には話せない。どうしようという思いばかりが募り、おなかは日々大きくなっていった。

ある日自宅のトイレで子どもを産み落とした。新しい生命は、トイレに溜まっていた数センチの汚水に浸かり溺死した。

家人が発見し、救急車を呼んだがすでに死亡していた。

その家の娘である中学３年生女兒が、警察に補導される。

図の経路をとおり非行児童として扱われ事情聴

取を受ける。

「なんで警察に補導されるの？」

「意味わかんない」

「殺人？誰が？」

「死体遺棄？だれが？」

「だれのこと言ってんの？」

「意味わかんない」

事情聴取の答えにはならず、身柄通告という形で
児童相談所に一時保護された。
そこに入ってもなお気持ちがおさまらない。

「人に迷惑かけてないじゃん」

「なに？一時保護って？」

「親は？迎えに来ないの？」

「なんで家に帰れないの？」

「意味わかんない」

一時保護所の生活は、本人にとって苦痛なことである。

入った時点から「意味わかんない」といって納得
ができていなかったため、悪態をつくこともしば
しばあった。

の生活を繰り返す中で、保育士は彼女と話し合
いを繰り返しながら本音を聞きだしていく。

「早くおなかから出て欲しかった」

「おなかから塊がでてすっきりした」

「だって好きな人の子どもじゃなかった」

「子どもなんてほしくなかった。」

「子どもがいたら邪魔でしょ！」

「塊だよ」

「かわいい？」

「かわいそう？」

「なんで？」

「人に迷惑をかけてないじゃん」

「塊だよ。」

彼女の言葉を振り返ってみると、本人が何をし
て一時保護されたのか理解ができていない。
これまでの生活の中でも規範を学びきれていなかっ
たことに保育士は気づかされた。
彼女から繰り返し出された素朴な言葉。

「意味わかんない」

「だれが？」

「なんで？」

その言葉をよく受け止めてみると我々おとなに
投げかけられた問題が見えてくる。

彼女をどうしてそのようにさせてしまったのかと...
非行児童という扱いで援助していったよかった
のだろうか...

今だから考えられることについて検討してみる。

1)「性」の問題

少女が中学3年生まで、幼児期から児童期、思
春期にいたるまで、どのような教育がなされてき
たのかは、保育・教育歴を聞いてもその内容の詳
細はわからない。しかし少なくとも思春期を向か
えているこの時期までに、少女が理解できるよう
な言葉で、「性」について、「性行動」と「妊娠」
について理解できるように教えていなかったこと
は事実であろう。少女が理解をする機会があった
はずである。遅くとも、小学校における保健体育、
あるいは理科教育のなかでも、体の第二次性徴の
こと、動物の性と人間の性のこと、など。学んで
理解するまでの過程がしっかりとおさえられてい
ない。十分に理解するような時間とその機会が得
られていなかったのではないと思われる。

性の若年化傾向に対して教育現場がどのように
向かうのかについてみてみたところ、見つかった
資料がある。幼児期から高等学校、特別支援学校
までの、まさしく幼児から思春期までを対象とし
た、「すべての教職員が取り組む 性教育指導マ
ニュアル⁵⁾」である。愛媛県教育委員会が21年3
月に作成している。幼児期からの発達段階をみな
がら、そこで「性」についての理解を深めること、

命を生み出す性の一人ひとりについて、さら人を思いやる気持ちについても加えられており、指導案とともに言及している。教育現場の実際としては、教員はどのように取り組んだらいいのかと、迷い、悩むことが多いなかでは、大変示唆に富む内容である。発達段階に応じた教育について、家庭や保健所などと連携を図りながら行っていくものとしている。このように教育の現場で、子どもをとりまく全ての大人たちが、共通認識をもって連携を図って取り組みをすすめていくなれば、この少女も理解できる教育の機会が与えられたのではないかと考えられる。

「性」というテーマでくりながら、関連することについてときほぐし、発達段階にあった教育がなされていけば、理解は深まってくるということが想定できよう。彼女のことは、今までかわった大人側に課題を投げかけているともとれよう。愛媛のような取り組みをしていない自治体は、この少女のようなことが起こらないように、関係する全教職員が取り組み、連携を図っていかないと、この「意味わかんない」が繰り返されていくことになる。その循環は避けたい。

2)「生命」の問題

生きる・生きているということの認識も理解する機会がなかったのかと思える。

「人間は生きている」「呼吸をしている」おなかに宿ったのは「人間である」「命をもった」ということである。人形やロボットではない。「呼吸をしている」「生きている人間である」ということの理解はどこで育まれるのであろうか。

生きものには命があるということは生物の飼育においてもみえてくる。生と死についての理解の契機ともなる。生み出すことがある性の仕組みをも理解した上での「命の誕生」と「育ちの理解」について、学ば過程をも準備して提供していくことであろう。

中学生の体験学習としての、保育の授業を取り組みの例もある。「赤ちゃんが生まれる」⁶⁾「あなたが生まれた日」⁷⁾という絵本と赤ちゃん人形を

持参して、命のこと、あかちゃんのお世話のこと、赤ちゃんがすでにかなり優れていること⁸⁾などの話をすると、そのことへの理解の一助になるようである。子どもとの直接体験ができる子どもの広場のジュニアサポーターにもなってくれる。生活のなかでの生きた赤ちゃんとのふれあいは、今までの自分の命が育まれた道のりがみえてくるように思えるようである。このような体験の契機となる場の経験をいかに組んでいくのかも重要な課題になるう。

「生命」の問題は、小学校、中学校、高等学校の学習指導要領⁹⁾の中では、体育・保健・家庭科・道徳・理科や学級経営のなかで指導されている。しかし、それぞれの教員の努力によってするのではなく、性の取り組みのように、命というテーマのなかで取り組めることが望ましい。保育・幼児教育・学校教育の中では、保育者、教育者である教員たちが、子どもたちに解るようなことばを選択しながら進めること、そして方法論をしっかりと検討した上で授業を展開していくことが望まれる。教育現場との連携の取り方もかわろう。

3)「犯罪」の問題

殺人は犯罪行為になる。小さな生命は、大きな手で口を塞げば呼吸をしなくなる。

大きな布を被せれば、呼吸をしなくなる。水も同様で、数センチの水にうつ伏せの状態で放置されれば呼吸をしなくなる。

人を殺せば「殺人」、それを放置すれば「遺棄」になる。罪になること、そのことが自分の生きる道のなかで重たくのしかかってくること、さらにそのことによって、法の裁きを受けることになる。社会の中での規範としての「法」について、生活のなかで学び、理解できるようになるには、日常のなかでその仕組みについて、大人たちが丁寧にかかわるということであろうか。さらに保育・教育の現場で積み上げていくことと連動させていけるようにすることであろう。どのようにしていくのかの具体策を多く提示しながら、ともに検討しあうことから始めていかなくてもはなるまい。

1) から 3) までのテーマについては、人間として、人として生きていくときの基盤になる事柄でもある。この少女の周りには、そのことを学ぶお手本になり、向き合って、素朴な疑問に答えてくれる大人たちがいなかったことになる。それだけ少女の叫びが聞こえる。「意味わかんない」の言葉の意味は、大人に向けられた、厳しい激しい叫び声であり、「助けてください」という意味をもった同義語としてみなせるのではないだろうか。「非行少女」という扱いをする事例としては、あまりにも重い。保護者のなかで出会い、そのごの生活は、自立支援施設になるであろう彼女に対して何ができるのだろうか。それまでの大人たちが彼女自身に考える機会の提供や学ぶことについての援助をしてこなかったことについて、あらためて考えなおしてみた。ふと漏らした言葉を、その叫び声を聞きとめていくことから始まり、その子どもの痛みを、真に受けとめていくことで、問題を抱えた子どもの生きるこれからを仕切りなおしていくことになると考えられる。これまでに学べなかったことを、彼女自身が「自ら生きる」という生活を通じて学ぶ契機をこの一時、保護所のなかでも見出せるようにしていくことが職員たちに課せられてくる。とりわけ専門職としての保育士に課せられてくる。

・一時保護所における保育士の役割

保育士は、子どもたちとともに生活をするからこそ見出せる。子どもたちの生活を日課のながれをおいながら、さまざまに支援・援助していく過程のなかに、子どもたちのこれからを探る手立てを挙げた例のように見出せていけるものと考ええる。保育士は日課のながれのなかで動いていくことに流されながら一日が終わっていくことになりがちである。保育士はそれを見直して、子どもたちの言動を聞きとめ、意識化して子どもの心模様としての情報として収集していき、その意味を探ることである。子どもたちは生活のしかたの学びなおしをしながら、時間の経過のなかで安定が得られる

ように、さらに自らの方向性をも模索できるようにしていくことになる。それが可能になるように保育士は、子どもの生活の段階の変化を受けとめてその基盤づくりへの提言ができるようにする。ふともらしてくることはの拾い出しとその意味を探ることが、子どもの痛みの理解につながり、その先の道のりを探る理解にもつながっていけるように思われる。

保育士としての勤務のなかでは、このように、生活のなかから見出した内容についてあったとしても、個別事例のことを検討する情報として出していくことはむずかしい。ここで検討したように、何気ない呟きから取り出していくことで一つの方向性も見えてくる。保育士が拾わなくてはただ単に流れてしまう言葉になっていく。日常をともにすることができる保育士だからこそ、見出せることではないだろうか。しかし、落ち着いてきたからこそその段階でだされてくる子どもたちの会話の内容を拾い出して検討することは容易なことではない。日常生活の指導の日々のなかでながれてしまいがちになる。ただ、その吐露するような言葉が出せるようになることは、子どもにとっては節目である。子どもの生活段階のを経て、だからこそになり、そこで拾い出すことがその後のにすすめていくことにもなる。保育士の役割の重要な要素ではないだろうか。

今後の課題

家庭崩壊により家族の機能を失った所には支援や援助の手立てが講じられる。児童養護施設や児童自立支援施設が家族・家庭の代替をし、多くのおとなの目で見守ってくれるという仕組みがある。しかし SOS の出し方さえ解らない家庭で育ち、育ってきた子どもたちが入所してくる一時的に預かる保護所には、一時保護所だからその不安から立ち直りの過程のなかでの言動が出されてする。そこから見えてくるのがこれからの子どもの自立へのカギにもなろう。なぜこのようなところにきたのかさえもわからない子どもたちの生活の

中からみえてくる様相は、単に支援のネットワーク体制のとり方、あり方論だけでは理解できないことがあるように思われる。子どもを取りまくまわりの大人たちが、その子どもと、一人の大人として向かい合うことができる「場」のなかで、そこに属する大人同士が連携をはかり、子どもと双方向に向かいあうことから動いていくこと、そしてそこでいわゆる子ども側からみる「お手本」の生き方を示していけるようにいることなのではないかと考える。

今後は、それぞれの大人に求められることについて、生活をともにする保育士だからこそ見出せる保育士のさらなる役割について、個々人の子どもとの対応の方法論も含めた検討をすることが課題となる。

おわりに

児童相談所の一時保護所において対応した子どもたちと、保育士としてかかわってきたなかから検討することで、場における保育士のありかたの一部がみえてきたように思える。多くの悲惨な事件の関係者としての子どもたちの生きることを支えていくには、保護所の機能が欠かせない。あらためて保育士の重要な役割を見出したことは連携のあり方の再検討にもなった。

白梅学園大学教育・福祉研究センターの研究員としての1年を終える今、研究成果の一部としてまとめさせていただいた。このような機会を与えていただけたことで、施設の保育士のあり方を問いかけることができたように思える。ある意味での子どもの「問題」の紐解き方が見えてきたように思っている。従来はともすれば、子どもの「こと」に目を奪われて、容易に社会のルールという枠組みで子どもたちの行動の善し悪しを判断してきたように思えるが、子どもを生活の場から省みることによって進め方がわかってきたことも成果の一部になった。

大変感謝している。

引用・参考文献

1. 厚生労働省（2003）次世代育成支援計画
2. 東京都練馬区（2010）次世代育成支援行動計画，平成22年3月
3. 厚生労働省（2010）虐待防止の手引き，2009年3月
4. 社会福祉士養成講座編集委員会編（2009）新社会福祉士養成講座 15 児童や家に対する支援と児童・家庭福祉制度——児童福祉論，太平洋社
5. 愛媛県愛知教育委員会（2009）すべての教職員がのため取り組む性教育指導マニュアル
6. 北村邦夫監修，WILL 子ども知育研究所編（2008）赤ちゃんが生まれる，金の星社
7. フレイパーク（2007）あなたがうまれた日，福音館
8. 産経新聞「新赤ちゃん学」取材班（2003）ここまできた新常識 赤ちゃん学を知っていますか？，新潮社
9. 文部科学省（2008）小学校学習指導要領
10. 文部科学省（2009）中学校学習指導要領
11. 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領
12. 武蔵村山市家庭支援センター（2008）武蔵村山市子育て応援ガイド 平成20年度版
13. 波平恵美子（1998）いのちの文化人類学，新潮社
14. 佐々加代子（2004）みんなで育て合う 子育て支援の実際と課題，犀書房
15. 佐々加代子（2009）言語教育，犀書房
16. シンシア・モナハン，青木薫訳（1995）傷ついた子供の心の癒し方 子どもは助けを求めている，講談社
17. 東京都（2009）児童相談所のしおり 2009年（平成21年）版